



MINATO TOKYO

Bulletin

みなと
ユネスコ

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/MITSUKO TAKAI PRES.
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL・FAX 03 (3434) 2233 発行人/高井光子

2016年3月1日発行 第143号

目次	
P1 巻頭言	P8-11 講演会「江戸の庶民文化を語る」
P2-6 シンポジウム「気候変動時代の水害と水不足」	P12-13 書道教室 / 抹茶教室
P7 新年懇親会	P14 事務局便り / 編集後記

港区と私

港ユネスコ協会理事 三輪 恵美子



70年前に終わった第二次世界大戦が過ぎて、八十路（やそじ）を半ば近くまで歩み続けてきた私は、人生の大半を港区で過ごしてきた。

勿論、戦争中の大半も、港区で育った。戦前の家の近くの地図は今でも細かく描ける位、私は当時の家の近所の地図、家々、人々のことを、はっきりおぼえている。

戦時中、当時のはどかな町並みであった住宅街が、ある日突然、町会からのお達しで、「空襲で焼ける前に、住宅密集地は、強制的に壊すように」との回覧板が廻ってきた。

若い男性達は戦争に行ってしまうと、働き手も少ない戦時中のこと、空襲で母校は焼失し、学校もお休み中、中学校に入ったばかりの年の私もかり出され、毎日、埃まみれになって、近所の木造家屋や立派な鉄筋の洋館を、鳶口を持って、モンペ姿にマスクをして、一日中かかって、ひたすら壊した。壊すのも決してやさしいことではなかった。四本柱が立っているお手洗いなどは、頑丈で、なかなか壊れなかった。子供ながらに、こんな立派な鉄筋の家を壊すなんて、勿体ないとつくづく思った。

その一角は、以前、長い間私が生まれ育った家のすぐ近くにあり、ここ半世紀は、今は亡き薬屋さん・町会長でもあった方の発案で、桜の木が植えられた。今ではすでに老木になって、町の立派な公園として、あたかも何の歴史も知らぬかのように、春夏秋冬、近所の人々の平和の象徴の憩いの場として、存在している。現在、周り

に住む多くの人々は、おそらく、何も知らないであろう、戦時中の港区の一角の強制疎開の話である。

その後、空襲がひどくなり、私自身は数か月港区を離れ、疎開をした。家は運よく焼けずにすみ、終戦後、また、港区の家に戻った。出征して、どこに行かされてしまったかわからなかった父も、戦後1年経って、幸い無事帰還した。

私は幸か不幸か、戦前・戦中・戦後、曾祖父の時代から、現在に至るまで、教育を受けた学校もすべて、この港区である。

結婚して、主人の関係で、数年海外に行くことはあっても、日本の住み家は、常に同じ港区である。

何時の頃からか、家の周囲には、高層住宅が建ち並び、住宅地の住所も変わり、便利であった都電もすっかり姿を消して久しい。時々、もしも父母が私の家を今、探して帰ってくることがあったら、どうやって見つけれられるであろうかと思う。

高速道路も知らず、とっくに他界してしまった父母、仲良しであった近所の友人たち、この先、この地球は、どのようになって行くか、何が起こるか、全くわからない昨今、コンピューター、スマホに明け暮れている現代の若者たち、幼い子供たちの次の世代が、平和であることを、ひたすら祈る。

港ユネスコ協会の会員とならせていただいている私は、これからの残された僅かな年月を、港区で、平和のうちに、皆様とご一緒に学び、楽しく過ごせることを、心から感謝し、幸せに思っている。

テーマ

気候変動時代の 水害と水不足

日時：2015年12月9日(水) 18:30~20:30
会場：港区立麻布区民センター・ホール



パネリスト

基調講演：高橋裕氏

東京大学名誉教授 日仏工業技術会会長 日本国際賞（2015年）、クリスタルドロップ賞（2000年）
著書：「国土の変貌と水害」「川と国土の危機」（岩波新書）など。

森下郁子氏

河川学者 一般社団法人・淡水生物研究所所長、環境省自然環境保全審議会委員、東京都地下河川構造検討委員会委員など歴任。 著書：「川の健康診断」（毎日出版文化賞1977年受賞）、など。

沖大幹氏

東京大学生産技術研究所教授 気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次報告書統括執筆責任者。
著書：「水危機 ほんとうの話」（水文・水資源学会学術出版賞2013年受賞）、など。

コーディネーター：永野博 港ユネスコ協会副会長

講演内容

高橋裕氏

気候変動というのは、日本に大きな影響がある。島国として臨海部の開発に力を入れてきたが、50年、100年先を深刻に考えないといけない。開発規制をどうするのか、人間をどうするのか？

川や水のことを考えるとき、日本人の自然観が重要になる。気候変動はグローバルな問題だが、それぞれの国が水害や水不足にどう対応するかは、自然観によって大きく左右される。

枕草子を読むと、清少納言が川や雪といった自然の変化プロセスをよく観察していることが分かる。

万葉集や古今和歌集など、名だたる日本の古典には川や雪、雨のテーマが多い。一例を挙げると、山部赤人「田子の浦ゆ うち出でてみれば 眞白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける」

英訳は、”Coming out / from Tago’s nestled cove, / I gaze: / white, pure white/ the snow has fallen / on Fuji’s lofty peak”（リービ英雄訳）。

自分が動くことによって、見えなかった壮大なものが見えてくる、その視覚的驚きを訳すのにリービ英雄氏は大変苦労したと聞く。



武田信玄は治水の傑作と言われる信玄堤を築いた。私の想像では、信玄は釜無川と御勅使川の合流点へ度々足を運び、出水前後の河床変化を読み取る感覚を身に着けたに違いない。

鷲尾塾龍氏(1894~1978)は急流河川の神様と呼ばれた方で、私の先生。富士川の砂防ダムに連れて行って頂いた。土砂群の堆積から、その土砂の経歴を読むことが出来た。

安芸皎一氏(1902~1985)は河相論という新しい河川哲学を提唱された先生だが、富士川所長時代は毎日必ず管内の河床の動きを観察しておられた。

橋本規明氏(1902~1969)は、常願寺川に卓抜な治水を施した。常願寺川は、日本で最も厄介な川の一つ。急流でしかも大量の土砂を常に流す。

同じ川の上流に立山砂防を建設したのは赤木正雄氏(1887~1972)。日本には名治水家が沢山いる。

これから迎える気候変動時代という大変な時代にどう対処していくか?これまでの日本人の河川観を教訓とし、自分の河川観を築くことが大切である。

治水はハードとソフトをいかに調和させるかがポイントとなる。

例えば信玄堤を築いた信玄は、堤の上流側に神社を移設した。すると住民は参道となった堤防を大切にする。

徳川時代の治水奉行には、住民に協力させる知恵があった。

明治以後、ハードの技術がたいへん進歩したが、ソフトが少し鈍ったようだ。ソフトをどう考えるかがこれからの課題だと思っている。

森下郁子氏

気候と水に住む生物について話したい。

先月「長江と黄河」という本を出した。黄河は土木の研究材料が豊富であり、長江は生物学者の研究材料を提供する。黄河ではダムを作ったら、水を全部取ってしまい、下流には一滴も流さない。一方の長江では、ダムを作っても下流に配慮する。川の違いから民族の文化も異なり、これが中国の分かりにくさに象徴される二面性だろう。

私たちは黄河の方が歴史もあり価値あるものが多いと感じているが、現在は長江周辺から古い遺跡が見つかって優位に立っている。

気候が変わると生物の種類も変わる。黄河と長江は東へ流れるが、メコン川は南へ流れ、すべての気候帯を通して最後は熱帯のベトナムでメコンデルタを作る。長さはほぼ同じだが、メコン川の生物の種類が一番多い。

日本の川は短く、淡水魚の大きさは平均 12.3cm であるのに対し、世界一多様性が高いといわれるアマゾンの魚は平均 2.3cm である。

唐辛子は寒いところに行くほど長くなり、辛くなる。魚も熱帯に近づくほど小さくなり、数が増える。

メコン川で一番大きい魚は 4m になるし、アマゾン川でも 4~5m の魚がいる。

報道でも大きな魚を紹介するので錯覚しがちだが、これらは何百もの小さな魚が支える頂点に君臨する魚である。

ミシシッピ川やボルガ川が一番高い場所でも 300m だが、黄河、長江、メコン川は 5,000m から 7,000m という高いところから一気に降りてくる。

寒い時期には川が凍るので、魚はどうするかというと、鱗がなくなり冬眠する。

川は文化につながり、文化はまた川をどう支配するかにつながる。

日本では洪水が来たら人間が大変! だが、生き物は洪水がないと生きていられない。渇水対策でダムを作ると、いつも水があるから生物の多様性がなくなってしまう。

人間にとっては水害・渇水のコントロールは一つの技術だが、そこに水の持つ文化を加えて頂いて、程々のところで折り合って野生生物と生きていく社会を土木の方に構築して頂きたい。



沖大幹氏（パワーポイントを見ながらのお話）

* 今パリで開かれている COP21 に対して、そこで気候変動に関する科学的知見を集め評価報告書を提出する IPCC（気候変動に関する政府間パネル）で報告書のとりまとめをしている。



これは昨年横浜で開かれた総会での、質疑応答場面。各国からの意見を受けて計量的表現を消していき、「産業革命前に比べて 2°C くらいまでの気温上昇なら、GDP 比 0.2% から 2% くらいの経済的損失が生じるだろう。」という記述が残った。

パリでは 2% 目標が論じられている。IPCC は温暖化を煽っているだけじゃないかと思う人もいるかもしれないが、よく読んで頂くとまっとうな事が書いてある。気候変動はどんな影響があるの？ どんな深刻さなの？ という問いへの答えは、セクターによって、また従事する仕事によっても異なる。リスク認知や、どこから手をつけるのかという優先度も、価値観や目標によって違う、ということが書いてある。

* 温暖化を元から絶つという「緩和策」と、避けられないのであれば被害を最小限にという対症療法としての「適応策」のバランスが求められる。

クリーンエネルギーにすると、大気汚染も減らせるし、健康悪化も避けられる。これが「両得」。

反対に、バイオ燃料の使用やダム建設は、温暖化対策としては良いかもしれないが、生態系に悪影響を及ぼす懸念がある。統合的水資源管理 (IWRM)、自然災害リスク管理 (DRM)、持続可能な開発 (SD) と気候変動への適応策は統合されるべきである。

* 温暖化にはどんなリスクがあるか？ 高温で亡くなる方も増えるだろうし、沿岸の低地や小島嶼開発途上国では海面上昇や高潮の恐れがある。

パリの COP21 で 1.5 度目標を考慮することになったのは、一番高い場所でも 2m しかないような島嶼国は 2 度の温度上昇となると大打撃を受けるからだ。

道路や電線、水道などのインフラが破壊される可能性も高くなる。また、一番深刻な被害を受けるのは貧しい国、貧しい人々である。

* アメダス観測値に基づく雨の強さと日平均気温の関係を表すグラフを見ると、気温が高い日には強い雨が降り得ることが分かる。気温が 1 度上がると、大気に含まれ得る水蒸気量はおよそ 6~7% 増えることから、日本における夏の「ゲリラ豪雨」はこれから増えると想定される。

* 「X 年に一度の豪雨」に着目すると、20 世紀には 100 年に一度だった豪雨が、21 世紀には 300 年に一度となる、といった変化の恐れがある。

* 「洪水頻度と低水流量の将来変化」という図によると、日本、とりわけ西日本は洪水頻度が増加し、乾燥化が進むことが予想され、踏んだり蹴ったりである。

* では、どんな対策をすれば良いのか？ どんなに雨が降っても、そこに人が住んでいなければ被害は生じない。つまり、人間社会の側でも考えよう、社会の弱い部分を補強することでリスクを減らそう、というのが最近の考え方である。

* 水分野の適応策にはどんなものがあるか？ 治水推進、早期警戒システムの整備、雨水貯留、海水の淡水化、水輸送など色々考えられる。ただし、治水対策によって生態系に悪影響を与えたり、淡水化にはエネルギーが必要で却って温暖化に悪影響を与えるという面もある。

* 100 年に 1 度とっていた豪雨が 30 年に一度の頻度で降ることになれば、堤防もそれに応じて高さの水増し（気候変動プレミアム）が必要となる。過日の鬼怒川の堤防決壊も、もう少し高さがあれば、という箇所であった。温暖化しなくても有効な政策を、後悔の少ない政策「Low Regret Policy」と呼ぶ。

* 1,000 年に一度の津波も起こり得る、堤防が壊れることもあり得るというのは、分かっちゃいるけど表立っては言わなかった。

しかしこれらを考慮したうえでハードとソフトのバランスを取る時代が来ている。

鬼怒川の堤防決壊は 40 km² に被害をもたらした。一度に 40 km² の浸水というのはさすがに広過ぎるので、これを 10 km²、あるいは 5 km² で止まるような、2 枚腰、3 枚腰の都市計画で受け止めることが望まれる。

あと一つ、あれだけの水害にもかかわらず、亡くなった方は少なかった。こういう仕組みを検証して途上国の対策に役立てるのも、日本の役割だと思う。

討論

永野：日本人は挨拶する時、気候の話をするが、これは日本人に特有なのでしょうか？日本人の河川観と関係ありますか？

高橋氏：どこの国でも天気予報は出すが、日本のものは大変きめ細かい。日本の自然は変化しやすく微妙だから、丁寧な天気予報を要求するのだと思う。

永野：日本人は多様性について包容力があるようにも思うが、さきほどのお話では問題があるようでもある。

森下氏：水田で生計を立てる民族にとっては、水がなくなることが一番怖い。周りを見回して同じような考えをする人たちを長い時間かかって作り出したのではないかと、生物学的には考える。

他人のことを考えない個性豊かな人が育つのはやはり牧畜民族。共同体として皆で仲良くやりましょうというのが、水耕農民の末裔だと思う。

私が学生の頃、北海道には水田がなかった。ところが今、水田が増えて台風に度々襲われている。たかだか50年、60年だが人間の営みが起こした気候変動があるのではないか。

永野：常総市の話が出た。インドでもサイクロンの被害が出ている。私は下町生まれだが、キャサリン台風は経験していない。自分のところが被害に会わないと、真剣に考える余裕がないというか、考えなくてもすんでしまうようだ。

沖氏：水害の心配をしなくてもよくなったのは、日本社会が豊かになって状況が改善したお陰だ。

今日は水の話だが、日本には地震もあるし、火災もテロも怖い。インフルエンザなど感染症が広まる恐れもある。これら全部に気を配って暮らすのは大変だ。どこかで火山が爆発すれば、火山の心配をし、洪水があれば水害の心配をし、我が事のように考えて少しずつ自分の準備をするのが現実的でいたしかたないのではないか、と思っている。

来場者との質疑応答

質問1：気候変動にからんで、水不足が世界的問題になるのではないかと。2050年には人口が90億を超えるという。20世紀は資源をめぐる戦争が起きたが、21世紀は飲み水や農業用水をめぐる争いが起きるのではないかと危惧している。

争いを防ぐ国際的仕組みを望みたいが、その前提として、地球上のどこに水が分布するかを把握するシステムが必要ではないか。

沖氏：2050年の世界人口は90億と予想される。これから20億の増加なら、何とか対策可能なのではないかと考える。

水の分布については、まず各国が水のデータを把握する必要がある。降水量を測る、河川の流量を測るのは地味な作業で、お金がなくなると止めてしまう。日本は明治に入ってからすぐに雨量計を置いて気象観測を始めた。しかし国によっては1950年のデータがない。気候がどう変化したかが分からない。現在我々が得ているデータは、50年、100年先になって役に立つもの。人口衛星を使って雨量や雨雲の移動の様子を知ることが出来るが、途上国によっては技術がない。日本、米国、欧州、インド、ブラジルなどの衛星を組み合わせて世界中の雨量を観測し、インターネットで配信するシステムが出来ている。

もう一つ紹介すると、2つの衛星を並んで飛ばす。互いの距離は200kmくらいに、レーザーで間を計る。何か重いものがあると、重力が強いので少し下がり、間が短くなる。逆に重力が軽いところに行くときちょっと離れて間が長くなる。この差が10マイクロメートル、髪の毛の10分の1くらい。

重力の差を計ってどうするのか？気圧、海面、地下水、雪の変化が分かる。グリーンランドの氷が溶けている様子、アマゾン川の水が雨季と乾季で変わる様子も計ることが出来ている。あとは、人間がどこでどれだけ取水するかのデータ収集が必要。

質問2：隣国として、中国の水問題が日本にも波及してくるのではないかと心配している。

森下氏：先日、南水北調の運河が通じたので見に行った。北京と上海、広州との高低差が2mしかない。それで調



整のため、東平湖で 2m のかさ上げをした。東平湖は周囲 278 km で琵琶湖より大きい。人力で工事して、あっという間に出来た。中国は技術で解決できることは何でもやってしまう。

ただ、技術で解決する部分と、本来の文化で支える部分との調和がまだ取れていない。あの中国のことだから、いずれは調和が取れるようになると思っている。技術と文化がどれくらい協調しながら進むか、これは土木が抱える一番難しい、また急いでやらないといけな問題ではないか。

今、瀬戸内海でも琵琶湖でも、水質が良くなり過ぎて魚の生産量が減少してきたという現象がある。



せっかく下水道水を 3 次処理までしているが、どこかで処理をフリーにしないと牡蠣も出来ない、海苔も出来ないというところまで、実際に来ている。

水質の汚濁をどこまで許容できるのかという文化的な部分が全く欠けていた。生物が生きているという文化の部分を、どこまで技術の上にバランス良く乗せられるか、によって自然の恩恵に浴することが出来るか否かが決まると思う。

質問 3 : 昔の人は遊水地を利用した洪水調節を行ったし、もともと川の下流は流れが変わりやすく洪水を起こしていたと思う。どんどん人が住んでいって、今では災害が起きたときに逃げ場がなくなっている。下流に住む人に「ここは危ないから高台に移りましょう」とか言うのはダメですか？

高橋氏 : 川を溢れさせないという治水方針できたが、そのマイナス面が今出てきている。生態系的にも治水対策上でも、中小洪水は時々あった方がよい。

明治以後、人口が増えて都市に集まってきた。長い目で見ると、洪水の起きやすい場所に人が移ってきた。人が増えると水が必要だから地下水を汲み上げて、海面より低いゼロメートル地帯を作ってしまった。短期的には良いことが、50 年、100 年単位で見ると却って悪いことが非常に多い。

洪水常習地など危険地域、は開発規制すべきだと私は思うが、自由を束縛するとか所有権の問題のため出来ていない。場所を限ってでも、それが出来るようにすべきである。ただ水害を防げば良い、ではなく、治水対策に人の住まい方も考慮して少しずつそういう方向に持って行ってほしい。

沖氏 : 都市計画とか土地利用による適応策も有効だとして、IPCC でも評価されている。危険なところには住まないようにする方が、ハードを作るよりお金がかからない。ただ、住んでいるところから無理やり移れというのは難しい。あなたの命が危ないからと言われても、これまで大丈夫だったし、100 年に一回だし、もし災害が起こっても自分は大丈夫と思うのが普通の心理。ただ、日本は人口が減少するので、減るのに併せて徐々に、危ない処には出来るだけ住まないようにしていく土地利用の誘導ができるのではないかと。便利に効率よく、しかも安全にと欲張って、50 年、100 年後の日本をこうするのだという計画を作るべきだと思う。建築規制が一部で始まっているが、私の記憶ではまだ全国で 4 市町村くらいしかやっていない。

永野 : 港区や東京都に対して、こんな事やったら良いのではないかと、ご提案がありましたら。

沖氏 : 港区には高い所と低い所があるので、豪雨時には短時間かもしれないが水に漬かる可能性が常にある。うちはマンションだから大丈夫と思われるかもしれないが、地下に変電施設や貯水槽がある建物が多いので、防水、水密性を確認しておくことが大切だ。また避難勧告が出たら、外れるかもしれないが、とりあえず安全を確保することも大事。

森下氏 : 港区は「春の小川」の故郷なので、川とは仲良く付き合い合ってきた地域。この文化がこれから先、生きる時代が来るのではないかと楽しみにしている。

高橋氏 : 行政も防災のためにいろいろ手を打っている。しかし防災マップをせっかく作っても、今回の鬼怒川の被害地域の一部には配られていなかった。配布しただけの所も多い。

全国でも、ハザードマップの読み方が理解出来ない人が多いのではないかと。海拔何メートルという表示が随分東京では増えたが、設置すれば終わりではなく、読み方や意味を伝えることは出来ないか？

せっかくの情報を有効に使えるようにしたい。自分の家から駅までの道だけでなく、周辺についてもどこに何があるか、また地元の水害の歴史も知って欲しい。

(まとめ : 国際学術文化委員会担当常任理事 宮下ゆかり)

2016年 新年会員懇親会

日時：2016年2月6日（土） 12：00～14：30

会場：東京理科大学・理窓会倶楽部サロン

新春落語で盛り上がりました！

毎年恒例の新年会員懇親会を、初めての会場、神楽坂の「東京理科大学・理窓会倶楽部サロン」にて開催した。この会場は、松本副会長のご紹介によるもので、交通の便の良い、アカデミックな雰囲気の会場である。

正午に秋山雅代担当常任理事から開会のことば。続いて高井光子会長の新年の挨拶と、松本洋副会長の挨拶。永野博副会長による乾杯の音頭で懇親会が始まった。

新年会といっても立春も過ぎての春の穏やかな光が差す、旧暦の「新春」。立食を楽しみながら、新たな年への思いを込めて、あちこちで会話の花が咲き、和装の落語研究会のお二人も加わって、和やかな談笑で進んでいった。

食事が一区切りついたところで、友金守理事がひと言「今回、なぜ落研？」の説明。「当協会創設時から、慶應義塾塾長に顧問に就任して頂いている。そのご縁をいかして、清家篤慶應義塾・塾長室に直接お願いして、落語研究会の学生さんによる新春にふさわしい口演が可能になった。

落語研究会の渉外担当の法学部3年の加藤将志さんと打合せを重ねて、初めての落語口演が実現する運びとなった。」とのこと。

軽快な出囃子が加藤さん持参の携帯USB付きスピーカーで流れ始め、さあ！新春落語の始まりー！ はじまーり！

演目は、上方落語「愷気の独楽(りんきのこま)」。馬網(ばーねっと)こと、慶應義塾大学文学部2年の間陽さん。女性ならではの仕草も加えながら‘やきもちの独楽’を熱演。

京都ことばがやさしく響いてきた。



続いて「勘定板(かんじょういた)」。乱痴(らんち)こと、慶應義塾大学法学部3年の加藤将志さん。和服が大好きで、大学でも着物姿で授業を受けるという粋な学生さん。

雰囲気も語りも仕草も立派な落語家！途中半ばから羽織をさっと後ろに脱ぎ捨て、話の佳境に入っていく・・・堂に入った所作である。

お二方の扇と手拭いのあしらい、面を右左に振り分けての爽やかな語り、身ぶり手振りの熱演。所作と噺が一体となって笑いの連続のひと時だった。



会の後半は、委員会活動の報告。日本文化体験教室委員会、国際学術文化委員会、広報ブレティン・インターネット委員会の近況が紹介された。須田康司事務局長は、「お近くにお出かけの際はぜひ新橋の事務局へお立ち寄りください。その時々、協会の活動状況、そしてミーティングのスケジュールを始め、いろんな情報を共有できます。」と話された。

参加の全員から、今年の抱負や、趣味などをひと言ずつ伺うことができた。楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

最後は、山本俊介さんが、「皆様のご健康と港ユネスコ協会の発展を祈念して」と、めでたく締められた。



年に一回のこの新年会だけはアルコール付き。普段は飲まない方も、お神酒として乾杯だけはお付き合い頂いての楽しい会であった。

(まとめ:会員開発委員会 委員長 小林 敬幸)

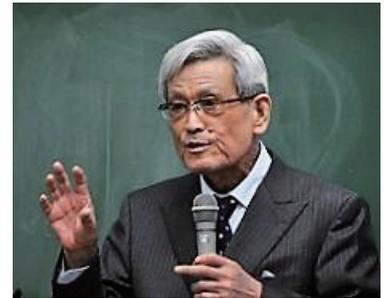
江戸の庶民文化を語る

講師：竹内 誠（たけうち まこと）氏

江戸東京博物館 館長

東京都江戸東京博物館は、江戸東京の歴史と文化をふりかえり、未来の都市と生活を考える場として、平成 5 年（1993）3 月 28 日に開館されました。JR 両国駅西口から徒歩 3 分、国技館の隣に位置しています。

竹内先生は開館 10 年前から、資料収集、展示の準備から、30 数年にわたって、関わってこられました。



講師プロフィール

昭和 8 年（1933）東京生まれ。

東京都江戸東京博物館館長。東京学芸大学名誉教授。徳川林政史研究所所長。

専攻は、江戸文化史・近世都市史。文学博士。

著書：『江戸社会史の研究』（弘文堂）、『元禄人間模様』（角川書店）など多数。

NHK の大河ドラマ、金曜時代劇などの時代考証も担当されました。

東京日本橋生まれのチャキチャキの江戸っ子であられ、子供の頃、浅草までの交通機関はポンポン蒸気の船だったと懐かしそうに話されました。

昭和 61 年（1986）から現在まで、週 1 回、両国の相撲教習所において、力士を対象に、相撲の歴史、特に江戸文化としての相撲や、礼儀作法などを教えておられます。また、現在、浅草寺の信徒総代も務めておられます。

ご講演内容の概要

江戸の庶民文化の代表は、何といたっても錦絵（浮世絵）でしょう。その錦絵は絵暦から発達しました。つまり暦という生活に即した文化でした。川柳も庶民の生活や人情の機微を表現した滑稽文学で、江戸で誕生しました。さらに、洒落本や黄表紙というユーモアあふれる大衆文学も、江戸という都市に生まれました。

江戸の庶民文化は生活文化そのものでした。したがって、これらの文化には、江戸庶民のさまざまな暮らしの知恵が散りばめられています。

I 江戸の三大娯楽

(1) 相撲

江戸時代の人気力士は、谷風梶之助、小野川喜三郎、雷電為右衛門。

現在も、力士はちょん髷を結び、土俵における礼儀作法などを大切にし、江戸文化の形を継続している唯一の存在だといえる。

力水や力紙で身を清め、土俵での礼、静→動→静の心構えの切り替え、（戦う前の静、本番では力一杯戦い、戦い終わった後は、敗者への思いやり、土俵に礼をして



不知火土俵入りの図
江戸東京博物館所蔵

から花道を去るという流れ)を大切にする。

力士の正式の服装は紋付羽織袴で、髪型も守られている。まさに伝統的な武士道を継承しているのである。

江戸時代から、興行として木戸銭を支払い、それが力士の生計となるという形、娯楽としてのプロの相撲になった。

江戸相撲番付の形は、宝暦7年(1757)、横2枚番付から、縦1枚番付に変わった。縦1枚番付の形になったことから、相撲ばかりでなく、いろいろなものの「見立て番付」を作ることが広がった。東西の山くらべ、川くらべ、酒くらべなど、数千以上の見立て番付が作られ、売られていた。見立て番付は、比較と序列を楽しむ知的文化であった。

(2) 歌舞伎

江戸の庶民にたいへん人気があり、人気役者の錦絵はよく売れた。

(3) 吉原(廓)

光と陰の世界。陰は、働いている女性。若くして身売りされてきた人たちは、苦勞し、多くは22歳～23歳頃に労咳(ろうがい・結核)で亡くなった。身寄りのない遊女たちは投げ込み寺といわれる浄閑寺に葬られた。

光は、流行の発信元としての華々しい遊女や花魁の姿。(江戸東京博物館では、光の部分として、歌舞伎の「助六由縁江戸桜」の三浦屋の場面で、遊女の花魁揚巻の姿を展示している。展示するに当たっては、先代市川団十郎が監修した。)

現在、流行っているファッションも、江戸時代の文化から始まっていたといえる。

廓では遊女には自由がなかった。しかし、火事になった場合、再建までの1年は市中に分散して仮宅営業がなされた。この時期は、割安で、しきたりも軽くなり、遊女たちも解放気分で人間性が出て、自由な恋も生まれたという。

吉原は男性だけのものだけでなく、地方から出かけてきた女性たちも、ここで行われる花魁道中などのイベントを見物したりしていた。

II 行動文化

(1) 名所めぐりと名物食べ歩き

『酒井伴四郎日記』は、幕末の頃、紀州藩の下級武士である酒井が参勤交代によって江戸・赤坂で暮らしている時に体験した江戸の名所めぐりや美味しい名物を食べたことを記した日記である。

『世事見聞録』(著者未詳)には、江戸後期における、長屋に暮らす女房連中のおしゃべりの様子や、芝居見物、寺社などの信仰スポット巡り、茶屋での名物料理や景色を楽しむ様子が綴られている。

これらの記録から、当時のお伊勢参りや江戸の物見遊山、温泉参りも武士のみならず庶民、女房連中も行動して文化を楽しんだ様子がわかる。



東海道五拾三次の内 日本橋
江戸東京博物館所蔵

(2) 両国の花火

花火は5月28日の川開きから8月28日の川仕舞い迄の三か月間、スポンサーがいれば毎日でも、打ち上げられた。この3か月間は幕府から、両国の水茶屋の夜間営業が許された。江戸っ子は夏の花火を愛し、楽しんでいた。

「一両が花火間もなき光哉」、「千人が手を欄干や橋すずみ」、「この人数舟なればこそ涼哉」

大森貝塚の発見で有名なアメリカ人エドワード・モースが書いた『日本その日その日』には、「河を開くお祭り」(両国の花火)に行った時の感想を、「大混雑の中でさえ、船頭たちは『アリガトウ』『ゴメンナサイ』とやり取りしてい

る様子から、優雅と温厚の教訓を学んだ。」と記している。明治10年に来日し、通算2年半滞在したが、日本を愛した彼は、「最初は野蛮な国に来たと思ったが、譲り合い・思いやりの精神に関心をもった」という。

日本人が当たり前と思って記録に残していない日本文化について、モースはアメリカと比較しながら文章に残した。

(彼は日本で初めて考古学の科学的研究の基礎を教えてくれた人物である。)

文化を考えると、主観的だけでなく、外からの目線で見、比較することが大切であることがわかる。

(3) 江戸の旅

すでに旅行案内業者が存在した。関東中心にした「東講」、大坂中心にした「浪花講」など。

これから旅をするという人に、入会金をとって、割り印のついた鑑札を持たせるシステム。旅人は行く先の宿場の定宿に着いて、半券を渡すだけでよい。身元のはっきりした人のみが利用するので、たとえ、一人旅でも安心して宿泊できた。業者は宿と旅人から手数料をとる。定宿は現在の指定旅館にあたる。貴重品を宿の主人に預けても一点の間違ひもないと信用大であった。

III 情報文化

(1) 広告宣伝時代の到来

ネタをもらって情報のほしい人に売るという文化はすでに、庶民に広まっていた。

現在のコピーライターともいえる山東京伝(江戸後期の戯作者、浮世絵師)の『ひろう神』は宣伝コピーを纏めたものである。

(2) 式亭三馬の宣伝力

当時は、人気のある三馬でさえも、作家業のみでは生活が苦しかった。彼の書いた『浮世風呂』の中に、自家製品の「江戸の水」を桐箱に入れ、ギヤマンの瓶(ガラス、当時は高価な品)に詰めて、「おしろいのはげぬ薬江戸の水」、後には、「おしろいのよくのる薬江戸の水」というキャッチコピーで、上等なイメージで売り出した様子が書かれている。

(3) 識字率の高さ

『ニコライの見た幕末日本』はロシア人ニコライが書いたもの。その中に、「読み書きできて本を読む人の数はヨーロッパ西部諸国のどの国にも引けを取らない。日本の本は、最も幼稚な本でさえ、半分は漢字で書かれているのに、それでもなおかつ、そうなのである。」と驚いている。

貸本屋は、江戸に700軒、大坂に300軒存在し、本は貸本屋を相手に出版された。庶民の男性も女性も、貸本屋から本を借りて読んだ。いかに識字率が高かったかがうかがえる。

IV 生活文化

(1) 錦絵(多色摺りの版画)

錦絵は暦から始まった。

江戸時代、日めくり暦はなく、1年の月は、30日は大、29日は小として分けられ、年間の暦を1枚の紙に刷られていた。

当時は支払いがみそかだったので、月の大小の区別を暦にしたものが生活に大切であった。大小暦が次第に発展して、明和2年(1765)、錦絵が誕生した。

大小暦→大小絵暦→判じ絵暦→錦絵

役者絵、相撲絵、美人画

有名な錦絵である江戸三幅対には、三大娯楽である歌舞伎の団十郎、吉原遊女の花扇、相撲の谷風が描かれている。



四世松本幸四郎の肴屋五郎兵衛
江戸東京博物館所蔵

(2) 川柳

明和2年(1765)柄井川柳が、人情の機微を表現した『誹風柳多留』を刊行した。教養の一つとして大名も川柳を詠むことが必要とされた。

(3) 黄表紙

挿絵入りであり、庶民に広く読まれた。発行部数は1万数千部と思われる。

ベストセラー黄表紙として、

* 恋川春町作の『金々先生栄花夢』(1775年)。地方から江戸に出てきた若者が、金持ちの家の養子になり、お金の翻弄される生活が描かれている。目が覚めた時、故郷の良さを自覚したというお話。

* 唐来参和作『莫切白根金生木』(1785年)。《きるなのねからかねのなるき》は回文になっている。話の内容は、大金持ちが貧乏人になりたがる様子を描いている。何をしても収入につながり、最後はお金(千両箱、小説では万両箱)にスペースを取られ、寝る場所さえなくなった。という夢のような話。

黄表紙は高度なユーモアと洒落に溢れた、大人の漫画である。

貸本屋を通してかなりの読者数があったことが推測できる。

質疑応答

Q1 識字率について 男女の差はあるのか?

A 残存する資料からは男女の差はわからない。村の名主を選ぶには記名選挙が行われた。男性については、これを元にして、本人が書いた名前か、書記の手によって書かれた名前かによって、識字率を判断している。平均して、本人の書いたものが70%という高い率であった。女性に関しては資料がない。

寺子屋は民間のものであり、地域や自分たちの必要に応じて、男女共学で同じ教室の中で学問を受けていた。

大工さんも昼の休みに本を読んでいたという記録もある。

Q2 庶民の豊かさについて

A 江戸という都市には、参勤交代の制度によって富がもたらされた。藩は約270あった。国もとでは農民たちが年貢を納め、そのお金の半分が一極集中の江戸で使われた。江戸には、元気に働ける人には仕事があったが、働けない弱者には、福祉という概念がないため、大変であった。

現代の目で歴史を振り返ってみると、文明が進めば進むほど人間を幸せにしてきたと言えると思うが、心は貧しくなっている面もあると言える。



江戸の庶民文化に対する深い愛に満ちた、ユーモア溢れる、歯切れのいい先生のお話により、参加者の皆さんも酔いしれたようでした。会場には、江戸が息づいているように感じられました。

参加者にも大変好評であり、ぜひ、江戸の文化の講演をまた開催して欲しいという声が多く寄せられました。

(まとめ：国際学術文化委員会担当常任理事 奥村和子)



日本文化体験教室
書道体験教室

日時：2015年12月12日（土）13：00～15：30
会場：港区生涯学習センター305号室

講師 金田 翠夢先生（毎日書道展会員）

- 内容 1) 書道の歴史や墨、筆、硯、紙などの説明。
2) 手本を見ながら練習。
3) 色紙に好きな字を清書する。



参加下さった皆様からのアンケートのご意見

- *とても素晴らしい体験が出来ました。
- *結構、難しかった。
- *思った以上楽しかった。
- *これからやる書道の参考になった。
- *なかなか書道をする余裕がないので、大変有意義な経験をさせて頂きました。
- *先生の教え方が良かった。



2時間の練習で、皆様の上達ぶりには驚きました。一人ひとりがご自分の好きな字を色紙に書きました。きっといい思い出になられることでしょう。

（まとめ：日本文化体験教室担当常任理事 平方一代）

日本文化体験教室
茶道体験教室

日時：2016年1月23日（土）13：30～16：00
会場：港区立生涯学習センター203号室



講師 松村 宗幸先生（裏千家）

参加者の中には、4歳女兒、男子幼稚園児1人、男子小学生1人、男子中学生1人が、親御さんに連れられて、皆さんにまじって、一緒に練習されました。

内容

- 1) 茶の湯の歴史説明
- 2) 畳の歩き方
- 3) お辞儀の練習
- 4) 薄茶のデモンストレーション
- 5) 各自、自分のお茶をたてる

参加下さった皆様からのアンケートのご意見

- *遠い日、日々習った記憶が蘇りました。
- *色々なことが出来て大変良かった。
- *初心者でも、経験者でも、分かりやすいので良いと思う。
- *お茶を頂く機会が多くなったので、自分で立てる経験はとても良かった。
- *難しかった。



前日まで、天気予報を見ながら心配していた雪も降らず、開催出来ました事を嬉しく思いました。体験時間は、皆様上手にお点前なさいました。その中でも、4人のお子様のお点前に心が和みました。村松先生のご指導の賜物と感謝いたします。

(まとめ：日本文化体験教室担当常任理事 平方一代)

事務局便り

【ようこそ 新入会員】 個人会員：小野田 マサ子さん

【今後の行事予定】（詳細は別途、チラシやホームページでご案内します）



☆ 4月26日（火）18：30～20：30 **港ユネスコ協会 2016年度 総会**

会場：港区立生涯学習センター305号室

☆ 6月の土曜日（日は未定）12：00～15：30 アゼルバイジャンの家庭料理

講師：駐日アゼルバイジャン大使館一等書記官ロヴシヤン氏夫人

会場：リーブラ・料理室（みなとパーク芝浦2F）

【ご寄付、ご寄贈品などの、ご協力ありがとうございました】

☆ 日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金（奨学資金として）

★ 12月9日（土） シンポジウム会場での募金 6,200円

★ 1月29日（金） みなと区民まつりバザー売上（追加分として） 1,000円

★ 2月1日（月） 第三回国際理解講演会会場での募金 5,050円

【ご協力のお願ひ】 常時受け付け中です。事務局までお願いいたします。

* 日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金

* ミンダナオ子ども図書館へ 寄贈品 衣料品（除毛織物）、新品・中古品（洗濯済）
寄付金（ミンダナオ島への寄贈品の送料分）



港ユネスコ協会事務局（火～金 10:30～17:30）

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp>

■編集後記■

◆ 現政権が「道徳の教科化」に前のめりになっているようである。目指すところは戦前の修身の復活と見る向きもある。ある哲学者の「教育において第一にすべきことは、道徳を教えることではなく、人生が楽しいということを体に覚え込ませてやることだ」という言葉をどうしても思い浮かべてしまう。（須田康司）

◆ 最近、人権をテーマとする講演を聴いた。ひとつはLGBT（性的少数者の総称）に関するもので、昨年6月米国の最高裁から同性婚は合法との判決を勝ちとるまで30年に亘り社会の偏見と闘い続けてきたNPOリーダーの話。もうひとつは米国に住み、テロ爆破を起こしたイスラム系の父をもつ息子が少年期から成人となるまで、自分自身に罪は無いのに世間の厳しい視線やいじめに遭い、名前を変え、20回も転居を続け、それでも生き延びてきた体験談。マイノリティや弱者の側に立ってモノを考えることの難しさを痛感した。（棚橋征一）

◆ 日本は人口減少社会に入り、超高齢社会になった。「人生100年時代」というのもうなずけるほど、身近にも90歳100歳の方がおられる。昨11月末出版された上野千鶴子著「おひとりさまの最期」を読んだ。「今後いや応なしに、おひとりさまが多くなり、病院や施設からの『死に場所難民』が増加していく。『在宅ひとり死』も、その気になればできる。それならば、できるだけ平穏で安心できるものにしたい。そのシステムづくりを・・・」というメッセージ。このシステムが整い、うまく機能して行けば、世代を超えて、大勢の人が安心して生きていけるように思う。（高井光子）